

特集

北海道の新生

地域の資源を活かした取組み

我が国は、北海道の豊富な自然や広大な国土を活かして、国全体の安定と発展、その時々々の国の課題の解決に寄与することを目的に、北海道開発法に基づいて、これまで総合的な施策を推進してきました。

現在、第6期となる北海道総合開発計画では、①食料基地としての役割強化、②新たな産業育成、③環境保全、④観光交流の促進、⑤国際交流と人材開発の拠点づくり、⑥安全でゆとりある快適な地域社会の形成、⑦人流・物流・情報流の基幹的ネットワークの推進が重点課題として挙げられています。国土交通省では、これらの重要課題に積極的に取り組んでいくこととされています。

今回の特集では、こうした北海道に関する取組みの中でも、地域資源を活かした各種施策について解説するとともに、NPO法人等による地域における取組みについて紹介します。



一面に広がるじゃがいも畑（美瑛町）



国道38号から芦別岳を望む（富良野市）

- 解説：地域資源を活かした北海道総合開発の推進
（北海道局 企画課）
：「シーニックバイウェイ北海道」の取組み
～まるで映画のワンシーンのように、心に深い道がある～
（北海道局 企画課 / 地政課）
：北海道内の自然再生事業
（北海道局 水政課）
：港を活用した観光振興
（北海道局 港政課）
：「わが村は美しく - 北海道」運動
（北海道局 農林水産課）
：新たな産業の育成に向けた取組み（クリ・シエエネルギー・バイオ産業）
（北海道局 企画課）

- 寄稿：未開の大地に吹き込んだ情熱
田村 喜子（作家）
：私たちの「シーニックバイウェイ北海道」
藤本 多佳子（NPO法人グリーンステージ 事務局長）
：釧路湿原における自然再生事業
新庄 久志（釧路国際ウエットランドセンター 湿地保全主幹）
：そのままでロケセット
渋谷 明都（コーディネーター）
：「わが村は美しく - 北海道」運動に参加して
湯浅 優子（「わが村は美しく 北海道」運動第1回コンクール全道審査委員 / 「つつちゃんと優子の牧場のへや」オーナー）

地域資源を活かした 北海道総合開発の推進

北海道局 企画課

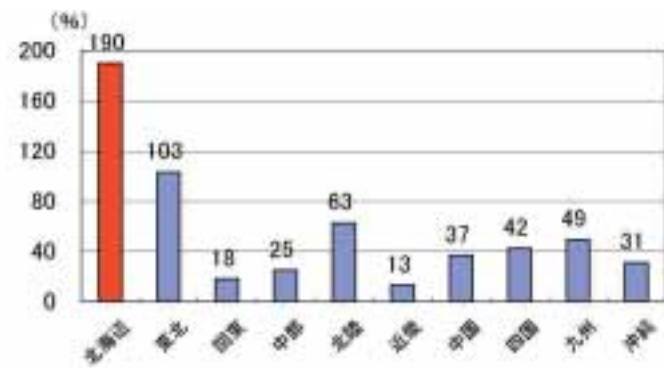
北海道総合開発の方向性

今後の北海道総合開発計画の推進に当たっては、北海道が有する多様な地域資源を活かし、以下のような課題に重点的に取り組むこととしています。

1. 食料基地としての役割の強化

北海道は我が国の耕地面積の24・7%を有するとともに、漁業生産量の26・3%を生産しており、我が国の食料生産の約2割(カロリーベース)を担っています。我が国全体の食料自給率は40%ですが、北海道単独では190%(2002年度、カロリーベース)と高く、ブロック別に見ると、自らの地域の食料を賄いつつ他地域に食料を供給することが可能なほぼ唯一の地域となっています。《グラフ1 地域ブロック別の食料自給率》

的構築、生産から消費まで食品を総合的に管理するフードシステムの確立、地域の特性を活かした北海道型田园コミュニケーションの創造などの施策に取り組んでいく必要があります。



グラフ1 地域ブロック別の食料自給率(2002年度、カロリーベース)
出典:農林水産省「平成14年度の食料自給率」を基に北海道局作成

2. 観光交流の促進

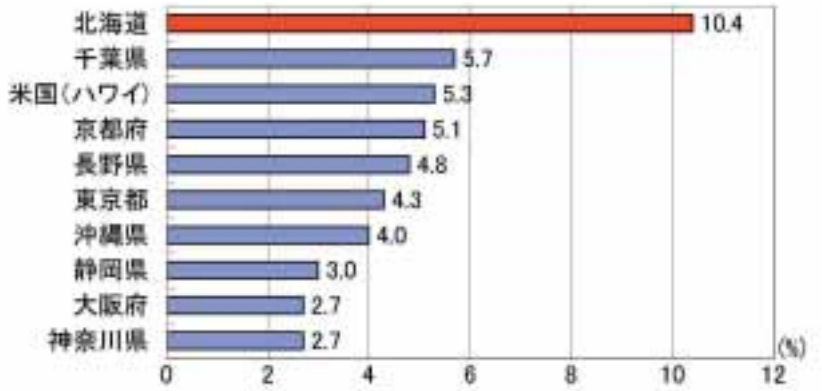
北海道は、雄大で美しい自然や農村景観、多様なスポーツ、レクリエーション空間、豊かな食材等に恵まれ、国民の人氣が最も高い観光・保養の場となっています。

また、国内だけでなく、東アジアの国々においても北海道の人氣は非常に高く、2003年に韓国、台湾、香港、中国の各国で行われたアンケート調査結果(合計)では、日本国内における希望訪問先として東京に次いで第2位となっています。《グラフ2 国内アンケート、グラフ3 海外アンケート》

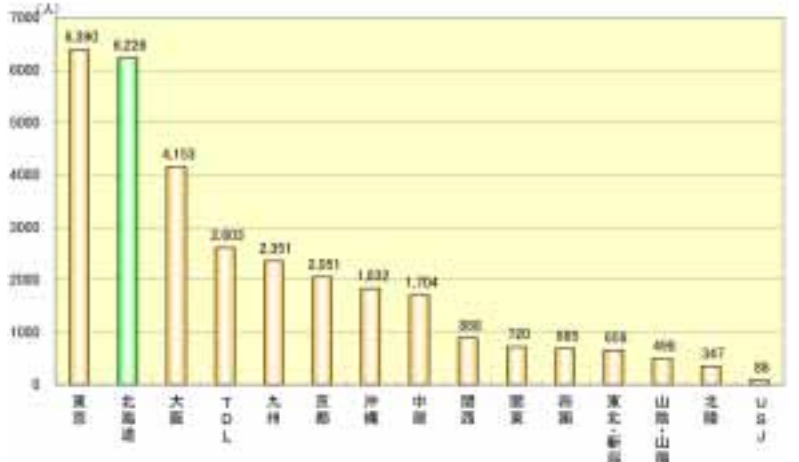
国土交通省では、北海道開発法による北海道総合開発計画(現行第6期計画は1998年度から2007年度までの10カ年計画)に基づき、国土交通省、農林水産省、厚生労働省、環境省にまたがる社会資本整備の推進、各種ソフト事業の実施等を通じ、北海道の総合的な開発を進めています。

今後は、農薬や化学肥料の使用を減らしたクリーン農業の推進などによる農山漁村における循環型社会の先駆

北海道を訪れる外国人観光客は、近年、増加の一途をたどっています。北海道は、アジア地域の人々にとって、時差をあまり感じることなく異なった気候風土や自然環



グラフ2 行ってみたい旅行先トップ10(2002年)
出典:(財)日本交通公社「旅行者動向 2003」



グラフ3 東アジア四カ国(台湾、韓国、香港、中国)における日本の訪問希望地
(国土交通省アンケート調査(2003年))

境(冬の銀世界や流水、爽やかな夏など)を体験できる土地であり、今後ともアジア地域からの観光客の増加が見込まれます。

今後は、このような北海道の「ブランド力」を活かすとともに、各地域の魅力や価値を効果的に引き出すことにより、多様化する国民の観光ニーズや、急増する外国人観光客の期待に応えていく必要があります。

3. 新たな産業の育成

新エネルギー

北海道は、環境に優しいクリーンなバイオマス、風力、雪氷冷熱等の資源・エネルギーに恵まれています。この

バイオ産業

北海道では、でんぷん、セルロース、キチン質などの豊富な糖質資源の存在を背景にバイオテクノロジーの集積が進み、ライフサイエンス研究の拠点的な地域として成長しつつあり、研究開発に関する産学官の一体的な体制をより強化する必要があります。

産業クラスターの推進・形成

北海道の各地域では産業クラスター活動が行われており、その成果を活かした産業育成を支援するとともに、北海道大学北キャンパスを始めとする研究開発機能の集積と道内各地域の大学等のネットワーク強化が求められています。

4. 豊かな自然環境の保全

北海道には、現在、世界自然遺産への登録が進められている「知床」に代表される貴重な手付かずの自然や動植物が残されており、ラムサール条約に登録されている釧路湿原を始め我が国全体の湿地の86%が存在しています。

また、北海道は風力発電施設の導入量が全ブロック中第1位であり、環境にやさしい新エネルギーの導入が進んでいます。他方、自動車交通への依存度の高さ、冬の暖房への灯油の使用などから1人当たりの二酸化炭素発生量が全国よりも高いという問題も抱えています。

今後は、循環型社会の形成に向けて、新エネルギーの導入に関する検討や、廃棄物の循環型処理などの取組みを住民、企業、NPO、研究者、行政等が連携して更に進めていく必要があります。



北海道の自然 ~知床~ (世界自然遺産候補地)

解説

「シーニックバイウェイ北海道」の取り組み

「まるで映画のワンシーンのように、心に深い道がある」

北海道局 企画課
地政課

シーニックバイウェイとは

北海道は、雄大な自然環境やおいしい食材など優れた観光資源があることから、人気の高い旅行先として、年間600万人以上の観光客が道外から訪れています。しかし、観光拠点は広大な北海道の各地に分散しているため、北海道における観光の魅力をより向上させる上で、移動時における快適性の向上などが重要な課題となります。

シーニックバイウェイという言葉は、日本では耳慣れない言葉だと思いますが、もともとアメリカで国内旅行者への旅行サービスの向上を通して地域活性化することを目的に制定された制度で、英語で「景色のよい」を意味するシーニック (SCENIC) と「わき道」を意味するバイウェイ (BYWAY) から構成されている言葉です。

「シーニックバイウェイ北海道」は、アメリカの取り組みを参考に、北海道における美しい景観の保全、活用を基



北海道の沿道景観 (左：苫前町 国道232号、右：千歳市 国道453号)

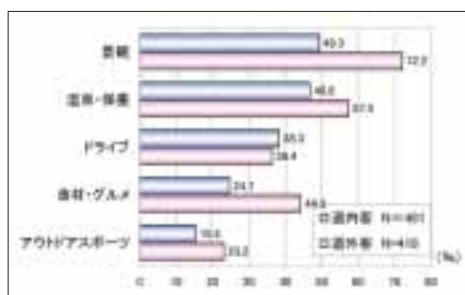


図1 北海道における旅行目的
H12 北海道開発局資料



図2 観光施策の位置付け
H11 北海道経済部「観光行政に係る市町村アンケート調査」

本とした地域連携や観光振興を図ることを目的として、現在準備を進めている制度です。この制度では、地域住民主体のダイナミックな運営体制づくり、ブランド形成によるコミュニケーションビジネス創造、総合的・持続的なプログラムマネジメントを基本方針にしています。

北海道へ導入する背景

北海道にこの制度を導入する背景として、二つのポイントがあります。

一つ目は、観光地としてのポテンシャルの高さ、ニーズの高さです。北海道を旅行する目的は、景観・温泉・保養、ドライブ等が上位になっており(図1)、特に道外観光客は、景観を楽しみにしている割合が高くなっています。

二つ目は、観光に対する地域の期待の高さです(図2)。地域は今後の地域活性化の柱として、観光施策を重視しており、観光が北海道の基幹産業の一つと期待されています。

ます。

国土交通省として取り組んでいる観光立国の実現に向け、北海道は果たすべき役割が高い地域となっています。

「シーニックバイウェイ北海道」について

(1)「シーニックバイウェイ北海道」の制度導入モデルの検討

国土交通省では、平成14年度から北海道に適したシーニックバイウェイ制度の導入を検討してきました。検討にあたっては、「北海道におけるシーニックバイウェイ制度導入モデル検討委員会」（委員長 石田東生 筑波大学教授）を設置し、モデルルートにおける試験的な取組みを行い、導入に向けた課題や対策を検討しています。

現在、二つのモデルルート（図3、千歳〜二セコルート、旭川〜占冠ルート）において、活動に参加する団体を認定（平成15年度はNPO法人や民間団体など計32団体）し、地域における活動を開始しています。今後、その活動成果を踏まえ、具体的な制度設計を進めていく予定です。



景観改善のイメージ
（上：現状の景観、下：景観障害物を撤去した際のイメージ）

(2) モデルルートにおける活動成果

モデルルートでは、各団体がワークショップや分科会等を通じて、シーニックバイウェイの理念を共有し、活動内容の広がりや活動団体間の連携促進、景観形成への意識の高まりなど成果が現れています。

（主な活動成果）

美しい景観づくり

千歳〜二セコルート景観分科会や旭川〜占冠ルート花分科会では、地域の沿道写真の収集や沿道植栽の現地調査などを実施しています。また、道路管理者と連携し、道路景観診断を行うなど景観阻害要因の抽出、改善方策について検討しています。

観光メニュー開発

真狩村づくり研究会や洞爺にぎわいネットワークなどでは、地域の魅力再発見に向けフォトコンテストを実施しています。

また、旭川〜占冠ルート体験分科会では、「冬に出会う感動」をテーマに冬の景観スポット発掘と体験観光の連携を目指したシーニックバスツアーを実施しています。

ホスピタリティ育成

二セコ国際部の会や二セコ羊蹄再発見の会WAOでは、外国人旅行者への語学・ホスピタリティ向上のため研修会を実施しています。

今後の予定

地域住民や自治体、各事業者と連携し、地域の継続的な活動を支援するとともに、持続的な発展が可能な制度設計を進めていきたいと考えています。



図3 モデルルートの位置図



モデルルートでの活動の様子
（上：道路景観診断、下：シーニックバスツアー）

シーニックバイウェイのホームページ
<http://www.scenicbyway.jp/>

北海道内の自然再生事業

北海道局 水政課

豊かな自然環境を有する北海道

北海道は、全国の約5分の1に相当する森林を有するとともに、自然植生の割合が全国平均の約3倍に達し、山岳・湖沼・森林・湿原等は豊かな自然環境を形成しています。また、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約（ラムサール条約）」登録湿地に釧路湿原等6箇所（全国13箇所）が指定されているなど、我が国にとってかけがえのない豊かな自然環境が残されています。

さらに、北海道の農地、森林、河川、海域等は、都府県にはない雄大な景観を形成しており、こうした北海道の恵まれた自然環境を保全し、国民の大切な資産として次世代に継承していくことが重要な課題となっています。こうしたことから、平成15年1月に取りまとめられた「国土審議会北海道開発分科会企画調査部会報告」においても、「北海道の恵まれた自然との共生を図るため、住民



釧路湿原

企業、NPO、研究者、行政等と連携しつつ、順応的生態系管理の概念などの導入や流域圏の概念による河川、海域等の機能を連携させた自然環境の保全・再生に取り組む」必要性が指摘されています。

自然再生事業

自然再生推進法の成立

地球と共生する「環の国」日本を実現するため、「環の国」の基本的あり方や実現に向けての施策を検討することを目的に、内閣総理大臣が主宰する「21世紀『環の国』づくり会議」が設けられ、この中で「自然再生型公共事業」の推進が必要」との報告（平成13年7月）がなされました。

また、平成14年3月には、「新・生物多様性国家戦略」が閣議決定され、「自然再生」を今後展開すべき施策の大きな方向の一つとして位置付け、その具体策である「自然再生事業」の推進が規定されました。こうした背景から、自然再生に関する施策を総合的

に推進し、生物多様性の確保を通じて自然と共生する社会の実現を図り、あわせて地球環境の保全に寄与することを目的とした「自然再生推進法」が、平成14年12月に成立しました。

自然再生事業の創設

河川環境保全の取組みとしては、生物の生息・生育の場としての河川環境への関心の高まりを背景とし、平成2年度より治水・利水を目的とした効率性を最優先とした事業実施の考え方から、川らしい自然環境を極力保全する事業の進め方である多自然型工法の取組みが進められてきました。

さらに、平成9年には河川法が改正され、法律の目的として「河川環境の整備と保全」が位置付けられるとともに、平成14年度から具体的な事業実施手段となる「自然再生事業」が創設されました。

現在、北海道内では、釧路湿原や標津川等において、自然再生事業を推進しています。

北海道内における取組み事例

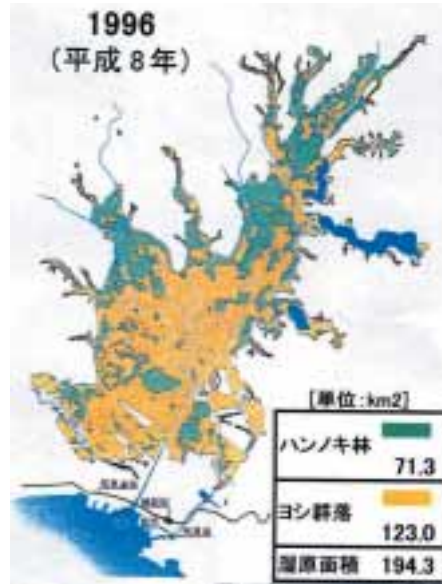
釧路湿原の保全

釧路川下流部に位置する面積約2万haの釧路湿原は、日本最大の湿原であり、特別天然記念物であるタンチョウをはじめとする貴重な動物の生息・生育の場



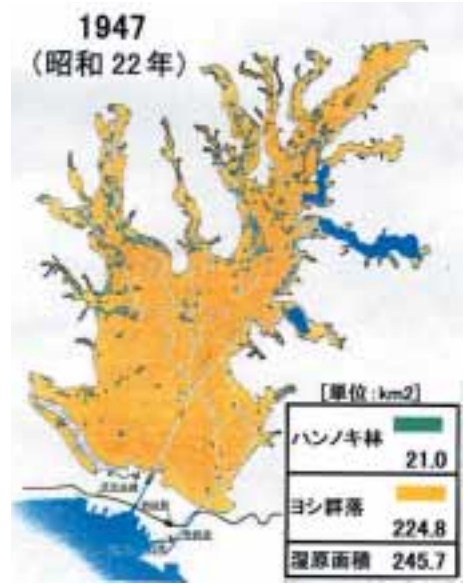
となっており、昭和55年には日本初のラムサール条約登録湿地に指定されています。しかしながら、流域の経済活動の拡大に伴い、近年の50年間に面積が約20%減少するとともに、急激な湿原植生の変化が進んでおり、その対応が急務となっています。

こうした状況を踏まえ、国土交通省は平成12年6月、湿原植生の变化の要因とされる湿原への流入土砂の抑制など、河川法に基づく具体的な管理が可能となるよう、湿



湿原植生の変化

潤した環境で生育するヨシ群に代わって、より乾燥した環境で生育するハンノキ林の面積が拡大している。



原の大部分を河川区域に指定しました。さらに、平成9年の河川法の改正を契機に、釧路湿原の保全と管理の進め方を検討するため、平成11年9月に学識者、関係機関からなる「釧路湿原の河川環境保全に関する検討委員会」を設立し、平成13年3月には12の具体的な施策からなる「釧路湿原の河川環境保全に関する提言」が取りまとめられました。

現在では、提言にある各種施策に関する調査・試験を実施するとともに、多様な主体の参画のもと、釧路湿原の保全を図るため、環境島等と連携して地域住民・NPO・専門家・関係自治体・関係機関等106名の構成員からなる「釧路湿原自然再生協議会」を発足させ（平成15年11月）、釧路湿原保全に係る全体構想の策定に取り組んでいます。



川レンジャー学習会(市民ボランティアによる湿原調査・河川管理) 釧路湿原



第1回釧路湿原自然再生協議会



試験地におけるサケ(写真中央)の行動調査(標津川)

標津川の自然復元型川づくり
標津川では、大規模な自然復元のモデルケースとなるよう、蛇行河川の復元など自然復元型川づくりの取組みを進めています。この取組みを進めるにあたっては、未知な部分も多く、また、高度な技術力を要することから、様々な分野の専門家からなる「標津川技術検討委員会」を平成13年3月に設置し、技術的な検討を進めるとともに、蛇行復元試験地を設け、河道および生物の生息状況について検証を行っています。



これらの取組みに関しては、公開の場で議論が進められているとともに、先駆的な取組みとして、国内外に情報発信をしています。

港を活用した観光振興

北海道局 港政課

北海道の港湾。何をイメージしますか。物流の場として北海道の経済を支えているばかりではありません。「裕次郎記念館」「北防波堤ドーム」「ヨクチャランド」…、北の港を訪れば色々なものと出会えます。ここでは、北海道の港湾の魅力を活用した各地の観光振興の取組みについて紹介することとします。



明治大正の雰囲気を漂わせる石造りの運河・倉庫(小樽港)



函館ベイエリアの顔となっている金森赤レンガ倉庫群(函館港)

歴史的港湾施設の再生・活用



サハリン航路の発着場であった歴史的港湾構造物「北防波堤ドーム」(稚内港)

小樽運河や函館の倉庫群は北海道で、二を争う人気の観光スポットとなっています。これらは古くからある港湾の施設を活かし、ノスタルジックな雰囲気を彷彿させることによって観光振興を成功させた例です。小樽運河はかつて小樽港の主要な施設として多くの船舶が利用していました。この一部をプロムナードとして整備することにより、石積み護岸や周辺の倉庫と一体となって魅力ある港湾空間が形成されています。現在、水質・底質の悪化による悪臭等を改善する

ための取組みが進められており、更なる観光振興が期待されます。また、函館港では、古い倉庫群周辺の港湾景観を再生・保存して倉庫の観光利用を図るなどの取組みがなされているほか、函館山から見た景観にも配慮しながら港湾整備を行っています。稚内港では、昭和初期に整備された、古代ローマ建築を思わせるような円柱と半アーチ型の護岸「北防波堤ドーム」を保存しており、イベント空間としても活用されています。

大型クルーズ船の寄港

北海道の魅力ある観光資源を求め、国内外の大型クルーズ船が年間数十隻寄港し、港湾を拠点とした周辺観光によって地域の活性化が図られています。室蘭港では、老朽化した岸壁を改良してクルーズ船用の岸壁に活用され



旅客船入港時に賑わう市民フリーマーケット(室蘭港)

れており、クルーズ観光客に好評なばかりではなく、NPOが中心となったイベント等が多数開催され、クルーズ船入港時には市民の賑わいの場として活気に溢れています。また、利尻

島・礼文島への離島クルーズの人気も非常に高くなっています。しかし、大型客船が直接入港できないために、テンドーボートによる危険な上陸を余儀なくされています。現在、沓形港（利尻島）では貨物船のほか大型客船も使えるように工夫した岸壁を整備している



沖合で小型船(テンドーボート)に乗り移る観光客(沓形港)

オホーツク流水観光の基地

冬期のオホーツク海沿岸は、流水により一面真っ白な原野の様な光景となり、他の地域では味わえない魅力があります。網走港と紋別港では、流水を身近に体験できる砕氷観光船を運航しており、1月〜3月にかけて多くの観光客が訪れるため、港湾ばかりではなく町全体が賑わいを見せています。特に近年、台湾等の海外からの観光客が急激に増加し、国際色が豊かになっています。網走港では現在、観光船の発着地を中心市街に隣接した場所に移設するための港湾整備が市民ワークショップの意見を取り入れながら進められており、官民が一体となりながら地域活性化が図られようとしています。また、紋別港では、港湾緑地においてゴマファザラシを数十頭飼育している「ゴマちゃんランド」が人気を集めている他、世界で唯一、流水を海中から観察できる氷海展望塔「オ



海水の海原を進む流水砕氷観光船オーロラ(網走港)



防波堤の上でゴマちゃんと触れ合う子供たち(紋別港)

ホーツクタワー」とタワーに続く防波堤に親水機能を付加した「クリオネプロムナード」が重要な観光資源となっています。



豊漁を祈願して瓶子岩に縄を掛けるかもめ島まつり(江差港)

まつりの文化を支える場

北海道には港湾を中心として発展した町が多く、また、ある程度まとまった空間の確保が容易であることから、多くの港湾で「みなとまつり」が開催されています。例えば、「江差追分」で有名な江差町では、江差港のスペースを利用して祭りが実施されており、多くの人で賑わっています。その際の港の賑わいにも配慮しながら港づくりを進めています。

これまで紹介したのは港湾を活用して観光振興の取組みをしている一例であり、他にも各地の個性を活かした観光振興が図られています。北海道の港湾は、本州とは異なり市町村が港湾管理者となっていることから、港湾の魅力を活かした地域密着型の観光振興が展開されており、今後とも、官民が連携したハード・ソフトの一体的な取組みを進めることにより、さらなる地域活性化が期待されます。

「わが村は美しく―北海道」運動

北海道局 農林水産課

運動の趣旨

明治の初期、先達たちが北の大地にクワを入れてから130年。北海道は、厳しい自然条件を克服し、今では我が国最大の食料基地となり、人々に多くの自然の恵みを提供しています。そしてまた、北海道の広大な大地に広がる豊かな自然と農林水産業など人々の生活の営みは、北の国ならではの魅力的な景観や温かなふれあいを生み出し、国内外の人々を引き付けています。



本運動に参加し、本年、日本農業賞大賞も受賞したソバ生産は魅力的な景観を形成している(幌加内町)

人々の価値観が多様化し、また、心身ともに健全なる生活への指向が高まる中で、北海道の農山漁村は、今まで以上に、安全・安心な食料の供給、自然環境の保全、良好な景観の形成などの多くの役割・取組みが期待されています。

「わが村は美しく―北

海道」運動は、北海道の持つグリーンな魅力の一つのブランドとして、人々が求める安全・安心志向に込めると共に、本州にはない広大な農村空間や自然の恵み溢れる山林、豊かな水産資源などの魅力を地域の資源として活用し、活力のある農山漁村を築くことを目的としています。

運動の特徴

この運動は、1960年代から始まった旧西ドイツの「わが村は美しく」運動を参考としています。地域の個性を活かし、地域住民自らが主体的に「グランドデザイン」を描く、住民主体の地域づくり、そしてその様な北海道の自律的發展を支える人づくりを推進していくものであり、行政、企業、NPOなどがそれぞれの役割を踏まえ、連携し、支援していくというものです。

特に「わが村は美しく 北海道」運動では、地域の生活や生産活動、自然環境の調和による魅力的な景観の形

帯広市の南西部にある八千代・広野地域は、雄大な日高山脈のふもと自然豊かな農村地帯です。地域では、「八広地域むらづくり構想推進委員会」を設立し、「地域外への交流拡大」を掲げ、その受入環境整備として、地域資源を活かした景観づくりに取り組んでいます。シンボルマークや案内マップ作成、エゾヤマザクラの並木づくりや体験農園など、地域住民が一体となって活動しています。

< 景観を育てる >



成(景観を育てる)、農林水産物や特産物のブランド化(地域の特産物を育てる)、これらの魅力を求めて訪れる都市住民等との交流(人の交流を育てる)という三つのテーマに沿って展開しています。

本来、これら三つのテーマは互いに結びつき、トータルとして地域の魅力・活力を作り出しています。しかし、地域の活性化の視点をあえて三つの側面に分けて運動を展開することで、各地域においてそれぞれのテーマを意識してもらい、自らの活動を見つめ直すきっかけとしたいだけのもと考えています。そして全てで満点を目指すということではなくとも、まずは一つのテーマでも良いから、運動に参加していただき、地域を磨き上げていただく。そうすることで、自ずと全ての側面において活動が活発化してくるということを期待しています。

運動推進のための取組み

本運動では、多様な活動を行う地域の方々をはじめ、それをサポートしようという行政、企業、NPOなどが、相互に情報を受発信し、地域を磨きあい、活動を支えあうことが重要と考えており、地域の魅力と活力を高めようとする各地域住民の皆さんの努力と行動に光をあて、それを多くの人々に伝えていくとともに、そうした活動を支援し、波及させていくことを目指しています。

1 「北海道田園委員会」

この運動の推進、支援のあり方等について検討するため、平成12年度から北海道内外の有識者による「北海道田園委員会」を設置しています。現在、当委員会委員には、北海道の経済界、消費者協会、農業団体、報道関係、学識者など、各界を代表する立場の方が就任されており、検討を行うだけでなく、地域活動のサポーターとしての役割も期待されています。

2 コンクールの開催

本運動の一環として、地域づくり活動団体を支援し、地域への啓発を図ることを目的として、地域住民主体の優れた取組みを表彰するコンクールを実施しています。

実施にあたっては、単に優良事例を表彰するだけでなく、コンクールへの参加を通じて、各地域が自らその取組みを振り返り、更なる発展へと繋げていただくことを目標に置いています。例えば活動間もない取組みでも、コンクールへの参加が可能であり、今回駄目でも次回こそは、というように発展を目指す限り、何度でもチャレンジが可能な仕組みとなっています。また、北海道を幾つかのブロックに分け、各ブロック単位で参加全団体をきめ細かに調査します。この調査を踏まえて、コンクール実施後における情報発信など、受賞団体のみならず参加される全団体に対し、様々な形でサポートを行うっていくこととしています。つまりコンクール自体がネットワーク活動の一環であり、各地域のPRの場、そしてコンクールでの受賞は一つの通過点、中間評価であること



ホタテの養殖を行ってきた寿都町では、単価低迷の中、有志の人たちがホタテ養殖施設を利用し、マガキの養殖と直接販売を始めました。アンケートにより顧客の声を取り入れ、きめ細かな対応を心がけ、都市住民との交流を行うなど、消費者との結びつきを大事にすることで評判を呼んでいます。

< 地域の特産物を育てる >

ブナの自然林北限のまち黒松内町では、人々が自然に積極的に関わり、地域の景観を守り育てる取組みなどを進めてきました。1999年には一層の景観形成と、自然の保全活用を目指し、「ぶなの森自然学校」が開校。自然体験型の環境学習や人材の育成などが展開されています。

< 人の交流を育てる >

も言えるのです。

これまでに第1回コンクールが平成14年に行われ、その結果、北海道212市町村中、70もの市町村から126件(114団体)の応募があり、三つのテーマに沿った「景観」、「地域特産物」、「人の交流」の3部門でそれぞれ金・銀・銅、特別賞として計24件が受賞しました。第2回コンクールは平成16年4月から応募を開始し、平成17年1月に表彰を行う予定です。

3 シンポジウムの開催、情報発信等

本運動のPR、地域活動への支援などを目的として、これまでに地域単位のシンポジウムや国際シンポジウムのほか、地域からの要望によるセミナーなどが開催されています。また、コンクール後のフォローアップとして、参加全団体の概要がまとめられた記録誌などが、全道の市町村はじめ、図書館や学校、JR各駅や農協などに配布されているほか、講演会や活動団体の交流会なども実施されています。

かつて著名写真家の作品により「丘のまち美瑛」を全国的に印象付けた赤麦のある風景。その後栽培面積も減り、15年ほど前から姿を消していたが、有志により夕陽に輝く赤麦の風景の復活と発泡酒や味噌などの赤麦を利用した特産物開発が行われている。(美瑛町)

るコンクールもまだ第1回を終え、ようやく第2回コンクールが始まるうとしている段階です。しかし第1回コンクールでは、新たな活動側面などの再発見があり、この運動参加後、更に活動を展開させている地域もたくさんあります。またコンクールは、国、北海道、農林水産関係団体のほか、北海道経済連合会や報道各社、NPO等の賛同により開催されますが、その第2回での賛同の輪は、第1回のおよそ倍以上と確実に広がっています。

地域づくりの「種」が、各地で「芽吹き」、それぞれ地域の生命力によって「大木」となり、それが広がり「北海道」という大きな「森」となる。森は常に再生産を繰り返し、その森に暮らす住民たちのみならず、国内外の多くの人々がその森からの豊かな恵みとやすらぎを享受する。この運動は、そんな「森づくり」のための一助となるよう目指していきます。



新たな産業の育成に向けた 取組み

(クリーンエネルギー・バイオ産業)

北海道局 企画課

北海道は我が国の発展を支える資源と特質を有している可能性あふれる地域です。しかし、経済産業構造が公共事業依存型となっていることもあり、近年、全国の中でも極めて厳しい経済・雇用情勢にあります。

このため、国土交通省では、北海道が活力を回復し、我が国の経済・社会の発展に積極的に貢献する観点から、地域の産業・経済を支える社会資本の着実な整備とともに、自立的発展が可能となる経済産業構造への転換に資する取組みを支援する先導的な施策を、関係政府機関、関係自治体等との密接な連携のもとに進めてきました。

平成16年度は、成長の可能性に富むとともに、競争力を持つ先導的な産業であり、加えて、北海道の有する資源と特質を最大限に生かしたものに重点を置いて予算措置を講じています。

ここでは、特に、新たな産業の育成に向けて重点を置いて進めていくクリーンエネルギー及びバイオ産業育成支援に係る取組みについてご紹介します。

クリーンエネルギーの導入・普及に向けた先導的取組みの推進

北海道は、全国でも最大級の埋蔵量を誇る勇払天然ガス、雪氷冷熱、家畜ふん尿や森林廃材等バイオマス等の資源・エネルギーに恵まれています。また、北海道開発の歴史の中で蓄積された農業や林業等バイオ関連、雪冷房等クリーンエネルギー関連の技術・研究等が豊富に存在しており、北海道内の大学や研究機関はこれらの分野について先進的な研究を進め、数多くの成果を出しています。

一方、北海道は積雪寒冷な気候である上に、広域分散型の地域構造であることからエネルギー多消費型の地域特性を有し、一人当たりの二酸化炭素排出量が全国の1.3倍と多くなっており、改善が求められていますが、その過程で新たな産業が発生する可能性があります。

このため、北海道発のクリーンエネルギー関連技術・研究等の成果を先駆的・先導的に導入し、効果的な地球温暖化対策を早急に推進するとともに、こうしたクリーンエネルギーに関する技術拠点を形成し、地域産業群の創出を図ることが期待されています。

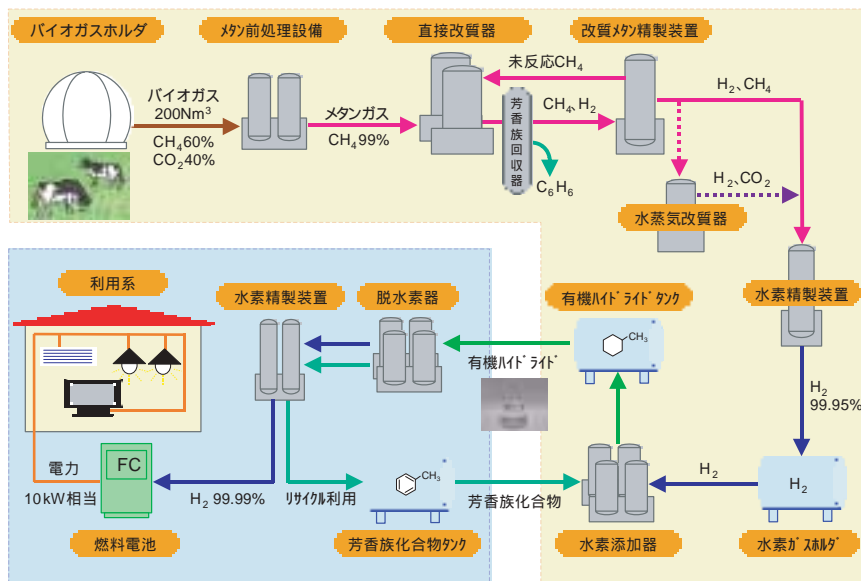
熱利用技術を核とした水素社会構築モデル事業調査

積雪寒冷地である北海道では、熱と電力を同時に発生する分散型電源である燃料電池の特性を十分に発揮させることが可能と考えられています。また、豊富に存在する天然ガスやバイオマスが燃料電池のエネルギーとなる水素の供給元として期待されることに加え、一般的には

扱いにくい水素を安定的に扱うことのできる有機ハイドライドシステムに関する研究が進んでいます。

このため、燃料電池の先導的な導入に向けて、有機ハイドライドを活用した水素貯蔵・供給システムについて調査を進めるとともに、電力需要と熱需要の季節間需給バランスを効果的、効率的に調整するため、燃料電池と地下蓄熱技術を組み合わせた熱エネルギー利用システムの検討を行うこととしています。

また、独立行政法人北海道開発土木研究所では、農村地域における水素エネルギー利用を担う方法として、家



(図1) 家畜ふん尿を活用した水素・燃料電池システムに関する研究 (独立行政法人北海道開発土木研究所)

畜ふん尿の嫌気性発酵から生じるメタンガスから二酸化炭素をまったく発生させずに取り出した水素を用いて燃料電池を運転するとともに、電気や熱を必要としない時には有機ハイドライドとして水素を貯蔵する研究を進めていきます。(図1)

雪氷冷熱エネルギー活用社会構築調査

北海道では冬の雪や氷を春、夏に冷熱エネルギーとして活用する取組みが進められ、農産物の低温貯蔵や建築物の冷房などに先駆的に導入している事例があります(図2)。しかし、必要な冷熱エネルギーを確保するためには大量の雪や氷を保管する大規模な貯蔵庫の設置など多額の初期投資を要することから、現状では導入が一部に留まっています。



(図2) 雪氷冷熱を利用した施設冷房の事例

このため、初期投資と維持経費のバランスの取れた、より低コストな雪氷冷熱エネルギー利用に向けた検討を進めるとともに、北海道の主要産業と密接に関連し地域の活性化に資する産業の創造(農産物低温貯蔵庫を核とし

た物流基地の構築など)等について検討することとしています。

未利用木質系バイオマスエネルギー等利活用支援調査

農林水産業が盛んな北海道にはバイオマス資源が豊富に存在していますが、稲わらや木質廃材などの木質系は他のバイオマスに比べて分解・処理が難しく、現状では燃料材としての利用や堆肥製造の際の副資材としての活用などに限られています。

このため、未利用木質系バイオマスの高度利活用について、北海道で技術的知見が蓄積されている水素発酵細菌による分解法や高沸点アルコール溶媒による物質分離法の実証を含め、有用物質や新エネルギーとして変換し、利活用する際の技術的、経済的、環境的な検証を行うこととしています。

バイオ産業など地域発の成長期待産業の育成・振興の支援

一次産品活用型バイオベンチャー育成支援調査

日本の食料基地であり、かつ豊かな自然に恵まれた北海道には、農作物や植物が豊富に存在し、また、寒冷な気候に対応するために進められた農産物の品種改良等により科学技術、組織、人材等が蓄積されています。

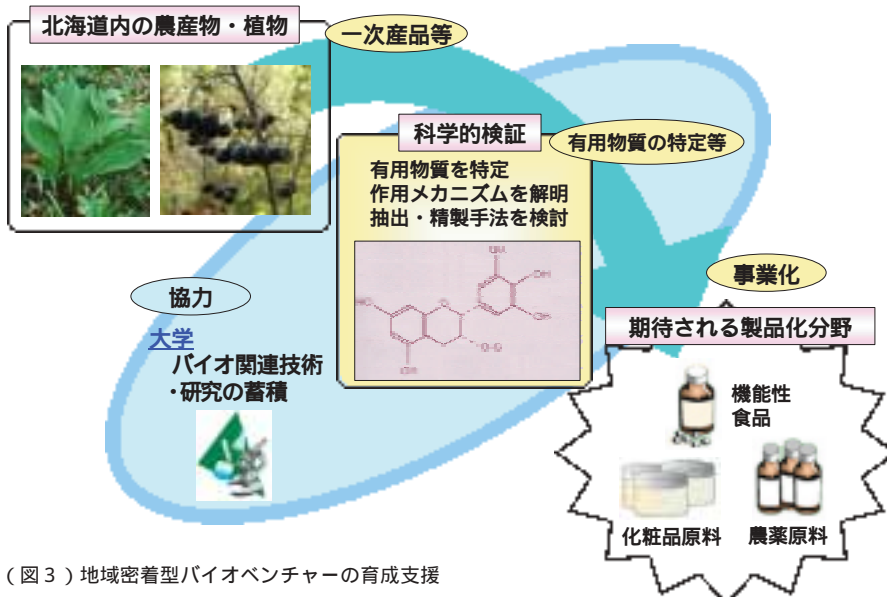
これらのメリットから、北海道は全国有数のバイオ産業集積拠点として評価されています。

このため、他の政府機関、自治体との連携の下、バイオ関連産業を戦略的産業と位置付け、北海道内の農水産物、植物等について有用物質の探索や有効性の説明等そ

の機能性の新たな観点からの再評価等を行うこととしています(図3)。

これらの成果が活用され、各機関による施策と相まって、バイオ関連のベンチャー企業の創出・育成が進み、北海道の産業構造が強化されることを期待しています。

バイオマス…再生可能な生物由来の有機性資源で、石油等の化石資源を除いたもの。



(図3) 地域密着型バイオベンチャーの育成支援

寄稿

未開の大地に 吹き込んだ情熱



作家
田村 喜子

そのころの札幌市は、街路樹もまばらな大通りに、2代目開拓使長官をつとめた黒田清隆の銅像が威風あたりを放って建っているほかは、赤レンガの北海道庁や札幌麦酒製麦所や帝国製麻会社札幌支店の瀟洒な建物、そして広い農園のなかに札幌農科大学（旧・札幌農学校）が点在している、人口6万余りの町だった。

北海道鉄道敷設法が公布されたのは明治29年5月14日、第4代北海道庁長官・北垣国道は、京都の琵琶湖疏水を完成させたあと、帝国大学の教授となっていた田辺朝郎に北海道幹線鉄道1000マイルの調査を要請した。大学教授の椅子を擲ち、北海道鉄道敷設部長となった田辺は、1600kmに及ぶ幹線鉄道ルートの実地踏査を行ったのだが、その任に就くにあたって、「これからわれわれが手がけるからには、いまの時代にあった構想をたて、近代的機材をつぎ込んでいかねばならない。それにはまず鉄道を縦横に走らせる。次にアメリカが広大な原野に秩序整然とした拓殖的都市整備をしたのをモデルにして、北海道の国土づくりをしたい」と決意を表している。

北海道の将来のため

ほとんどが原生林と湿地におおわれていた北海道だ。原生林を切り開き、湿地を改良し、社会資本を整備する。土木技術者である田辺朝郎は、その夢の達成に胸をふくらませたであろう。そして季節を問わず、現地を歩き回り実地踏査を行った。

北見途上は「はてもなき白樺の森ひるくらし しげる熊笹道をおおいて」（田辺が詠んだ和歌）だった。倒木をまたぎ、くもの巣を裂き、ときにはヒゲマの恐怖と向き合いながら、田辺は2、3人の助手とともに地形や地質を調査し、線路選定をしたのだった。その10年後に発行された写真帖には、整備された旭川停車場や石狩川神居古潭、第一石狩川鉄橋とともに、搬出する木材があふれる幾寅や風連停車場などの写真が掲載されているから、鉄道敷設事業は急ピッチで進められたと想像できる。

この間には軍需拡大に多額の費用を当てる一方、公共事業の急増で著しい財政難に陥った政府が、全国的に事業中止を通告するということもあった。そのとき田辺は即座に上京して井上馨大蔵大臣と面談し、北海道の事情を説明して、北海道の将来のために、鉄道事業の継続を強引に承諾させたという経緯もある。「今後およそ30年を要して、本州と言語、宗教すべて変わりない人口4乃至500万の強大な1地域をつくることは、日本国民が北海道に対してなさねばならない緊急かつ重要な仕事だ」との信念を貫いたのである。

苦難の踏査

しかし、道路さえ十分に整備されていない未開の地を歩き、ときには馬の背で踏査するのは、ひとことではい尽くせないほどの苦難の連続だった。写真帖には、とくに胸を打たれるような2葉の写真が含まれている。う

北海道の国土づくり

手元に明治40年発行の古い写真帖がある。表紙に『帝國鉄道北海道線 旭川釧路間全通記念』とある。それぞれの写真には、文字や文章は古風ながら、当時の状況がよくわかるキャプションがついている。20年ばかり前、田辺朝郎を主人公とする明治期の北海道鉄道建設の物語『北海道浪漫鉄道』を書くに際して、現地の様子をイメージするために繰り返し眺めた写真帖だ。

〔原〕測量隊幕屋敷



〔原〕測量隊幕屋敷

〔原〕測量隊幕屋敷



〔原〕測量隊幕屋敷

つそつとした原生林の中に張った「測量隊幕屋居(夏)」には、「広漠無人ノ山野ニ入り、線路選定及測量中、如此天幕内ニ起居ス。夏季、酷暑ノ夜、蚊虻軍ノ襲撃ヲ受ケ、1日ノ勞苦ヲ慰スルニ由ナシ。ソノ困難ノ状、思フベキナリ」とキャプションが添えられている。

同じく冬の写真には「白雪皚々、寒暖計八時二其ノ水銀球頭ノ中ニ没シ去リ、温度ヲ知ルニ由ナク、寒氣肌ヲ劈キ、髭鬚氷結シ、息氣雪トナルノ寒天、森林ノ間ニ幕営シ、夏季ト対照シテ其ノ勞苦ニ層甚シ」。

テントは簡単な木組みに吊った三角形の布製だ。北海

道に新天地を求めて移住したひとたちが、耐えられずに逃げ帰ったのは、その寒さではなく、無数の虫のせいだったという。まして人間がめつたに立ち入らない原生林の中だ。この地の蚊は夏の間にも3度も孵化するから、いくら生木を燃して蚊やりをくすぶらせても、蚊虻軍の襲撃のほつに勝ち目があつたにちがいない。

冬は腰まで浸かるほどの積雪の上にテントを張った山中では氷点下20度くらいに下がつたであらうし、まっげやひげが凍りつくのは当然だ。1日歩き回つて踏査をし、夜は虫や寒さに眠りを妨げられて、休息さえ十分に

取れない。想像を絶する苦勞を伴つたことがわかる。

旭川から釧路へ、こつとした厳冬の野営を重ねながら、田辺朔郎は日高越えのルートを見出した。そして石狩と十勝を結ぶ唯一の峠に、「狩勝峠」と命名した。万古斧を入れない針葉樹林と、強い風で樹木も伸びない峠の佇まい、峠にたどり着けば、目の前に展開する十勝平野の大観。田辺は和歌に託している。「みおるせば 十勝くにはらはてもなし 野火があらぬか煙たてるは」

北海道のリーダーたちへ

大正15年、北海道大学創立50周年に招かれた機会に、田辺朔郎は札幌から鉄道で釧路まで足を伸ばした。「12時間もかかつて、さぞ退屈なさつたでしょう」と慰めたひとに、「12時間でももつたいないくらいです。わたしがルート調査をしたときには20日かかりました」と答えている。このことばには北海道の国土づくりに携わり、使命感に燃え、情熱をたぎらせた土木技術者のロマンが漂つ。深い雪のなか、現在の函館本線ルートを踏査したときには「あまがける姿に似たり駒ヶ岳 雲のたてがみ風に乱れて」と大沼公園から眺めた駒ヶ岳を詠んだ秀逸な和歌を残している。

100年余り前に北海道の未来を真剣に考え、そのために誠意と情熱を傾注した男の志は、現在の北海道のリーダーたちに確実に受け継がれていること、私は信じている。

寄稿

私たちの「シーニック バイウェイ北海道」



NPO法人グリーンステージ 事務局長
藤本 多佳子

昨年発足したNPO法人グリーンステージ

「グリーンステージ」は昨年11月に認証を受けたばかりのNPO法人です。「シーニックバイウェイ制度モデルルート運営参加団体募集」時には、まだ準備室でしたが、エントリーさせていただきました。

私たちは、名前のとおり、このエリアの自然環境や人文風景を舞台に、エコツアーの普及や地域情報の発信などの活動により、「地域の活性化」を図る事を目的としています。事務局は、北海道の「ど真ん中」にある富良野市ですが、活動範囲は、大雪山系の南側のエリアであり、旭川から占冠村を中心とした広域で、シーニックバイウェイのモデルルートと重なります。農家や登山家、観光関係者、自然ガイドなどの集まりによるNPOですが、中心になったのは、アウトドア会社「アルパイン計

画」のスタッフでした。「アルパイン計画」は、体験型観光を通じて町おこしをする為に、18年前発足した会社です。

ドラマ「北の国から」放映後の富良野

約20年前の富良野は、テレビドラマ「北の国から」の放映や国鉄のキャンペーンポスターで「紫のじゅうたん」のようなラベンダー畑が紹介されるなど、あつという間に大勢の観光客が訪れてくる場所となっていました。

知名度が高まるにつれ、地元では、「ドラマが終了した後の富良野」や、「イメージに見合うような地域の魅力とは何だろう」という課題を抱えるようになりました。そんな時、実際に富良野にお住まいになり、地元と交流のある、「北の国から」の原作者、倉本聰先生から、自然を活用して、地域の魅力を高めているオーストラリアのアウトドア体験サービス業の事を教えていただきました。

倉本先生のアドバイスで、青年会議所のメンバー数人が、あつという間にアウトドア会社「アルパイン計画」を設立しました。「富良野一帯を、山登り、乗馬、カヌー、熱気球、ハングライダーなど、あらゆるアウトドアライフの基地にしよう」という夢の始まりです。

しかし、いざスタートしてみると、「アウトドア体験」という知名度は低く、集客は難しいものでした。また、用具の購入に必要な資金も、「アルパイン計画」では信用が

得られず、創業者が個人的な信用で融資を受けるような形でした。売り込み先の旅行代理店では、「日本で実施するには、10年ぐらい早いのでは?」と言われました。しかし92年に航空会社が「熱気球体験フ



ライト」をツアーに組み込んでくれたのがきっかけとなり、知名度が出てきました。やがて、修学旅行でもアウトドア体験を積極的に取り入れてくれるようになり、利用者の数が徐々に増えてきました。また、悪天候の時や冬期の対応としてハムやソーセージ、ジャムづくりなどの食品加工体験や陶芸、クラフト創作などのインドア体験も始めました。現在、「アルパイン計画」関連会社だけでなく、年間約2万人の方たちが「体験観光サービス」をご利用されるようになり、「アクティビティ」を紹介して「自然へアクセスする」という観光の切り口がこの地域に開かれて行きました。

エッセンスとして視点で眺める地域の個性

ここ数年、大型バスで観光スポットをまわり、体験メニューをたくさんこなす というマスマナーに陰りが見え、旅には、いろいろな選択肢が求められる時代になってきました。

富良野でも一昨年、ついに「北の国から」が終了し、とうとう「最大のPRメディア」を失ってしまいました。「グリーンステージ」はこうした時代の流れから、地域のニーズに合わせ誕生した組織です。観光関係者だけではなく、いろいろな人たちが、自然を守り、環境を活かし、地域経済を盛り上げる事に取り組みうとしていきます。

この地域は、四季を通じて、さまざまな魅力に溢れています。旭川から、国道237号線を南下するにつれ、ドライバーは様々な風景に出会うことができます。十勝岳連峰の山岳の景色、道路に沿って流れる河川のせせらぎ、丘の風景、ラベンダー畑を始めとした四季折々の花畑、東大演習林の樹海、金山湖。そんな風景の中で、先を急がずに車を降りれば、夏はサイクリングやキャンプ、ラフティング、冬は山スキーやアルペンスキー、加

えて、温泉、魚釣り、農業体験 と豊富なメニューを楽しむ事ができます。いらした方には、地元との交流や地域の魅力を味わう為に、ゆつくりと滞在していただきたいのです。その為に、まず、私たち自身もつと地域の魅力を知り、それをアピールするために、広域で運動をしていかななくてはなりません。そのサポートとして、「シーニックバイウェイ」への期待は大きいものがあります。この制度は、「道は、地域の魅力、誇りといったものを焼き鳥の串のようにつなげ、地域全体をおいしく味わってもらえる為に存在している」と言ってくれているように思えます。

シーニックバイウェイで第一歩の活動

「グリーンステージ」は、体験観光分科会に所属しています。「深山峠観光開発振興会」「かなやま湖の森212」と私たち三つの団体が協力して、「冬に出会う感動」をテーマに「地域の串刺し」を考えてみました。それが「冬のモニターバスツアー」です。



北海道の冬は、厳しいイメージばかりが先行してしまっています。実際の冬の生活はそんなイメージとのギャップを感じるばかりか、この時期にしか絶対に味わうことが出来ない素材が豊富にあり、ブランドとしての付加価値は夏以上に高いという自信があります。

しかし雪道は確かに不安です。道に慣れず、安全に目的地に

着く事が精一杯。そこで、「冬の魅力的なポイント」を串刺しするバスツアーを実施してみてもどうか? というアイデアが生まれました。「景色のよい道路」、「アクティビティ」、「地元ガイド」、そして「食」を柱とし、各地域の「とっておきのお勧めポイント」を紹介する内容です。



まず、実際に走ってみなければ、と昨年12月、仮コースで、検討試乗会を実施してみました。体験分科会がバスのナビゲーターとなり、関係者による試験走行です。国道237号線を走りながら、道路状況を見て、ナビゲーターお薦めの寄り道に、どんどん入って行きました。しばらく走った後に、バスから降りてスノーシュー体験とビニールシートを利用した雪滑り。参加者は、関係者にもかかわらず仕事を忘れ、雪の感触を楽しんでいました。再びバスに戻ると、今度はスペシャルゲストの登場です。「北の国資料館」の館長が「このバスの中でしかお話ししませんよ。」という「北の国から」ロケのエピソードを披露してくれました。やがて、コースの中間点中富良野町の体験農場に到着し、昼食タイム。スローフードレストランのシェフによるお弁当を食べながらのワークショップです。関係者以外にも観光ボランティアの方や、卒論でこの制度を取り上げる女子大生にもご参加いただき、意見交換が活発に行われました。「シーニックならではのバスツアー」というテーマで議論をしながら、この制度と地元のかかわりあい方、他の地域との連携の仕方などが見えてきたような気がしました。昼食後、冬にも温室で栽培しているラベンダー園を見学した後、

国道を北上し、帰路に着きました。

次は、一般のお客さまにモニターになっていただき、観光客のお立場からご意見を伺う予定です。本格運営は、次年度と想定していますが、運営方法、体制、従来のツアーとの差別化、参加団体の皆さんとのコンセンサス と、課題はたくさんあります。しかし、このバスツアーが検討されるプロセスにおいて、「シーニックバイウェイ」の一つの成果が出来上がると考え積極的に進めていくつもりです。

シーニックバイウェイ制度への期待

個人は、東京から富良野に移住してきました。そんな「よそ者」からすると、この地域のポテンシャルは本当に高いと感じます。地域づくりに対する住民の情熱と、いろいろなチャンスを活かすスキルを感じさせられます。しかし、厳しい経済状況という現実はこの地域も例外ではありません。

「シーニックバイウェイ制度」の募集パンフレットに「地域の夢を美しい道でつないでいくという新しい事業制度」というコピーがありました。この言葉のとおり、民間同士の連携がスムーズに図れ、「前例がないからこそ、バックアップする」という頼もしい行政サポートを大いに期待します。

そして、私たち自身もこの制度をきっかけに具体的な行動を起こし、次への確実なステップを踏み出していきたいと思っています。



寄稿

釧路湿原における 自然再生事業



釧路国際ウエットランドセンター
湿地保全主幹
新庄 久志

湿原の保全はなぜ必要か

「なぜ、あらためて税金を投入してまで湿原を再生しなければならぬのか?」「一方で湿原の農地開発を継続し、他方、それに隣接する湿地でその修復と再生に取り組む、それが可能なのか?」。

釧路湿原自然再生事業小委員会での討議、これらの議論は、そのまま、1999年、コスタリカの首都、サンホセで開催された第7回ラムサール条約締約国会議における一つのワークショップの討議を思い起こさせた。ラムサール条約史上はじめて、湿地の修復や回復、再生について討議され、勧告が採択された締約国会議、その草案が検討されたワークショップだった。各締約国の代表、国際NGO、

各地の国内NGO、地域団体、研究者が、さまざまな事例の紹介とともに、検討を重ねた。早急に、建設された上流のダムを取り除くか、その構造、運営を改善し、下流の湿地を取りもどさなければならぬ。さもなければ、われわれは家畜を飼いつづけることはできないし、生活用水を確保することもできない。今こそ、住民の生活を支えている湿地を取りもどさなければならぬ。」「内陸の湿地が失われたために、河川の河床に堆積する土砂が河口や沿岸に流出し、藻場に堆積して、水産資源が壊滅的な打撃を受けた。」「河川敷を開墾してつくられた農耕地が、これまで経験したことのない洪水に見舞われた。洪水を制御するには、湿地を取りもどし、緩衝帯となつて洪水を受けとめる湿地の機能を有効に活用することが肝要だ。」「湿地を干拓した結果、その地の微気候が変動し、果樹園がこれまでなかつた霜害の被害を受けた。湿地を再生し、微気候の回復をはかつて、湿地の機能を賢明に活用する農業手法に転換しよう。」「

これまで私たちは、湿地・湿原を、開拓・開発の対象としてだけ注目してきた。湿地・湿原の自然環境の価値と機能の活用についてよりも、農業用地や工業用地、住宅用地への転換などを求めて、改変すべき対象としてのみ注目してきた。しかし、その結果、予想もしないさまざまな災害に直面することとなった。そして、それは、湿原の野生生物のみならず、私たちの生活基盤そのものを揺るがす事にもなってきた。湿地帯、河川敷を拓いて築かれた広大な耕作地は、未曾有の洪水に見舞われた。湿地に造成した果樹園を霜害が襲った。雨期に出現するはずの湿地が姿を消し、みるみる砂漠化がすすんだ。藻場を失つた沿岸では、「磯焼け」といわれる現象が拡大していった。

ワークショップでの討議を経て、勧告の草案が作成され、締約国会議で採択された。湿地と湿地環境の修復と再生に関する勧告は、解決しなければならぬ湿地環境の保全と管理に関する切実な、緊急アピールでもあった。

現在、果樹園では、一部を湿地にもどし、水路を構築し

て微気候が回復しつつある。河川敷の農耕地では、湿地の持つ緩衝帯としての機能を活用した洪水制御手法を取り入れ、成果を上げつつある。雨季に出現する湿地帯も、上流のダムの再構築と運営の改善によつて、徐々に回復しつつある。内陸の湿地の修復・再生事業に着手した結果、しだいに土砂の流出が減少し、藻場が回復しはじめた。

もちろん、これらの取組みには、莫大な資金と労力と時間が費やされている。そしてこれらは、私たちをして、あらためて、多様で豊かな自然環境の価値について再認識することとなった。現在、ラムサール条約では、もし、どうしても湿地の開発、土地利用の転換が必要な場合には、対象地に相当する湿地環境を別の立地に新たに造成するといふ「ミイグレーション」(開発の影響緩和)という手法の採用も提案している。このように、現在、世界各地では、湿地を改変した後の、そのリスクを直接体験し、あらためて、「湿地と湿地環境の修復と再生」という新たなテーマ・課題に取り組み始めている。



夏の釧路湿原

釧路湿原からのシグナル

釧路湿原自然再生事業は、そんな世界各地の動きの中で、これらと連携しつつ、スタートした取組みと考えることができよう。しかし、そんな中で、釧路湿原自然再生事業は、各国の事例と少し様相を異にしている。それは、釧路湿原が、かつての湿原の地積が約60%に減じたといえ、いまだ私たちは、湿原生態系の損失にともなう直接的な被害・災害は被っていない。もちろん、タンチョウをはじめとする湿原を唯一の生息・生育地とする野生生物の生存が危うくなったり、近年、湿原の河床において、土砂の流入・堆積が顕著になり、たびたび土砂を含んだ流水が湿原に氾濫して、湿原の植物群落が変容したり、一部の淡水漁業の漁場が失われたりはしているが。

また、湿原内の河川の流路が改変され、湿原の水位を支える河川の水位変動が増大したり、水の生態系を涵養するといわれる湿原の湧水が、周囲の丘陵地の土地利用のために枯渇したりして、安定した湿原生態系の存続が危惧される現象も観察され、確認されている。しかし、まだ、地域住民の生活を直接脅かすような事例はない。釧路湿原自然再生事業では、これまでの世界各地の経験から、近年、観察されるこのようなさまざまな現象は、将来、地域の人々の生活に直接かかわる災害がおり得るシグナルとしてとらえる。そして、さらに、湿原生態系に致命的な損傷を与える前に、一部を修復し、すでに失われた湿原生態系の再生を図ろうとする。そして、将来に向けて、どのように湿原生態系と共生し、いかなる賢明な手法を用いて、湿原生態系の持続可能な利用を図っていくかを明らかにしようとする取組みなのである。

釧路湿原に与えたインパクト

ところで、釧路湿原自然再生事業をすすめていく上で、これまで湿原生態系に加えてきたさまざまなインパクト・干渉についていっしょに検討することが求められる。つまり、

加えたインパクト・干渉に対して湿原がどのように変化・変容したかを把握し、その結果、どの種の干渉を取り除くことが必要なのかを知るとともに、修復、再生事業の「ゴール」について検討するのである。

湿原生態系へのインパクト・干渉は、大きく二つに分けられる。一つは、湿原生態系を直接、改変したものである。泥炭地や湿地林、あるいはスゲ類叢生群・ヤチボウスを農耕地に開墾したり、住宅地、工業用地を造成したものである。また、湿原を蛇行して流下する河川の流路を直水路化するとともに、川幅を拡張したものなどもこれに当たる。二つ目は、湿原生態系に対する直接の改変ではなく、湿原に隣接する丘陵地あるいは道路などにおいての樹林の伐採、土地利用のための地形改変などの行為による、間接的な湿原生態系に対する影響。雨水の流入、土砂の流入などである。

湿原生態系に学ぶ

釧路湿原自然再生事業の実施にあたって私たちは、おののインパクト・干渉の質について解析し、それぞれに対応した事業・施策の実施、展開が求められる。

ところで、修復・再生事業をすすめていく時、その手順や期間、事業の規模などについての検討が必要になってくる。また、修復・再生事業の到達目標・ゴールについても明らかにしていくことが求められる。この種の課題に対する回答やヒントをどのようにして得るのか。それは、現在、展開している湿原生態系そのものの営みから得ると言うことになる。

釧路湿原に人々がかわつてすでに1世紀になろうとしている。その中には、半世紀以上も前からのかかわりや数十年前のもの、ごく最近加えられたものと多様である。そしてそれらは、湿原生態系のさまざまな部分で展開している。これに対して湿原生態系は、それぞれに対応して反応して変化し、変容している。つまり、そこには、人々のインパクト・干渉に対する結果、湿原生態系の多種多様な

反応、変化、変容、遷移が展開しているのである。従って、私たちは、これらの多様な、それぞれの、いわば一種のモデルケースから、湿原自然再生事業をすすめる上での手法、施策、求めるべき修復・再生の「ゴール」などについてのヒント、アイデアを得ることができるのである。

地域づくり・地球環境への貢献

湿原自然再生事業をすすめるためには、現在の湿原生態系をつぶさに観察し、そこから手法、道筋などを学ぶのである。湿原自然再生事業は、地域を支える自然環境を取りもどし、地域を生き返らせ、同時に、地域からも、地球環境の保全に寄与し、貢献するのである。

釧路湿原自然再生事業は、現在、世界各地で取り組まれている「湿地と湿地自然環境の修復と再生」プロジェクトと連携しつつ、地域を支え、地域を蘇らせ、新たな地域づくりを求める、中核となる取組みのひとつであると言えよう。釧路湿原自然再生事業の全容について、すべての人々に公開、普及し、人々がその過程を観察し、体験し、学び、人々が、地域が「湿原とともに生きる」意義とよるこびを等しく享受し、分かちあうといった、新たな地域づくりに貢献することが期待されていると考えるのである。



水辺教室

寄稿

そのままでロケセット



コーディネイター
渋谷 明都

イメージのジグソーパズル

私の場合、『渋谷 海が欲しい!』そんな1本の電話から仕事が始まる事もあります。海と言っても波打ち際か、港か、山から見ると、全く出来上がりのイメージが違います。撮影場所を選ぶ上で参考にする物ですが、何の為の撮影かによって違ってきます。映画やVシネの場合は、台本を送っていたら、CDジャケットの場合は、出来上がりのジャケットのイメージを聞き、アーティストの歌の入った素材を送って貰います。ファッション誌であれば、モデルの着用する服のブランド名と、モデルの演じるイメージ（例えば、週末を郊外で過ごすイギリスの寄宿舎の女学生等）を伝えて貰います。口答だけで『こんなストーリーで、必要なのは階段を二つと、坂

道と扉を一枚くらいかな。』などと言つ、少しアバウトなオーダーを受ける事もあります。

その様な情報をもとに、私の頭の中には出来上がりの画が浮かびます。その完成図に、1ピース1ピースパズルをはめ込むように、もつすでに知っている場所を当てはめたり、なければ、頭にその画を入れながら、それにピッタリ当てはまる場所を探しに、時には車を走らせ、時には狭い小路へと自ら迷い込むのです。

さまざまな表情を見せる海や港

魅力いっぱい海や港ですが、そこを小樽という設定で使う訳ではありません。

あるドラマの中の回想シーンに出てきた、シベリアの雪原は、『吹雪のシーンを撮りたいので、牧場を探して』と言われたにもかかわらず、『牧場ではそのイメージは撮



埠頭に係留するロシア船



防波堤

れません!』と断言し、呆れる電話の向こうの存在に気づきながらも、石狩市に近い小樽の海沿の空き地を使う事を提案しました。現場に監督が最初に訪れた際の『ええやないか、ほんまに荒涼してるわ!』という言葉は、すぐ側を沢山の雪捨てタンクカーが走行している事などはロケ地の選定には関係ないということの意味していました。

中央埠頭に着岸しているロシアからの船は古い物が多く、その錆びた外観や剥けかけの船の名前、その前に積まれた古いタイヤの山々は、私の目には最高のオブジェとして映ります。それだけ映しても贅沢なのに、ある有名なグループの、ヴォーカルの初ソロCDジャケット用に、彼がその船の前に立たずんだ画は、どこか異国の、港の夜の妖しささえ感じられました。(ファンの間では、サンフランシスコ辺りか?との声も)

又、小樽には大小様々な防波堤があります。コンクリ



坂道と海のある風景

ートで大きなブロックのプール型を作り、海に浮かべ現場まで運び、そのプール型の中に石を入れて沈めて作られた防波堤。百年近くも昔に作られ、町を守ってきた防波堤。その姿は控えめではあるが、強い存在感がありとても魅力的です。

この防波堤も最高の撮影場所となります。東小樽海岸側では男性アーティストをCDジャケット用に、高島側では沖縄の三人組のアーティストを雑誌用に、まるで南の島の小さな防波堤で撮った様に撮影しました。

アジアへGLOVE LETTER

今までに紹介した作品は、一部メディアやファンや私の中で感激した物で、被写体となったアーティストを初め撮影スタッフは小樽での撮影を機に、この海に囲まれた土地を好きになってくれ、その後何度も訪れてくれ

います。ただ、観光振興と言つ部分で一般的にわかり易い結果となったのが岩井俊二監督の映画『GLOVE LETTER』です。小樽を小樽として撮らない私ですが、ラブレターの場合はストーリー上小樽が重要な位置を占めていたので、作品作りに参加させて頂きました。

上映後五年ぐらい経った頃から、観光に新たな動きが見えました。

作品の中に出てきた冬の景色、特に白い雪は沢山のアジアの人を魅了しました。明治・大正を経て生き抜いてきた石造りの倉庫群。小樽人が道を教える際に自然と口をついて出てくる『あそこを下がって』『ここを上がって』の元となっている、ゆるい坂やきつい坂。そんな風景が沢山つまった映像というラブレターがアジアへと届き、ここ数年でかなりの人達が小樽を訪れています。映画のシーンの撮影場所を探して歩く熱心なファンもいれば、北海道に留学を決めて移り住んでいる学生もいます。先日開催されていた『雪あかりの路』という冬のイベントには、年々韓国から沢山のボランティアが参加を希望し、異國小樽のイベントに欠かせないキャンドルの灯りを、每晚絶やさぬようにと、会場を廻ってくれていました。期間中運河周辺では沢山のアジア圏の言葉が行き交いイベントに華を添えています。

ありのまま

港から始まった町。明治の初頭からの歴史。石炭の積み出し港として栄え、潤った町。荷役の為に作られた運河。今では1.5キロくらいになった運河。今も残る味のある建物の数々。何人もの建築家がここぞとばかり小樽へと集まり、当時の網元や豪商がお金にいとめをつけず、彼らに建物を造らせた。所狭しと建物が建ったので、路地は複雑に入り組んでいる。作品によっては手を加えて

いる物もありますが、元になる素材がきちんとしているからこそ、手を加えてもきちんとした画になるのです。

観光誘致・ロケ隊の誘致が話題となる今日この頃ですが、そこで暮らしてきた人々・今、暮らしている人々の生活の息づかいが感じられてこそ、小樽の街の良さがあるという事を忘れないで欲しいです。

これ以上高い建物は増やさず、建てるのであれば低く。建てるより壊さず。ありのままの地形に沿って。ありのままが、そのまま生かされるような街であり続けるために。敢えて言つのであれば、足し算より引き算で、町並みを考えて欲しいです。

『撮りに行ってあげましょ』ではなく、『撮らせて下さい』と言われる街でいたい。そんな願いを込めて、大好きな・大切な北の町より、海で繋がっている皆様へ。



北運河

寄稿

「わが村は美しく - 北海道」運動に参加して



「わが村は美しく - 北海道」運動
第1回コンクール全道審査委員
「つつちゃんと優子の牧場のへや」
オーナー
湯浅 優子

私の暮らす新得町。その小さな町から「わが村は美しく 北海道」運動第1回コンクールに、二つの取組みが応募しました。「人の交流部門」の審査員としても関わりの、他の多くの取組みや地域を訪問することができたことは幸いです。今回は身近な二つの取組みと、審査の中で心に残ったいくつかの特徴的な取組みをお伝えしたいと思います。

「レディースファームスクール協議会」 が教えてくれたこと

まずは、金賞に輝いた「レディースファームスクール協議会」について。

「レディースファームスクール」は、平成8年に開校された、全国で初めての女性だけの農業研修施設です。この施設は、40戸足らずの小さな集落の中に来たこともあり、その周辺の農家の皆さんが集まり、地域全体で

その事業を支えています。それが、この「レディースファームスクール協議会」です。研修生は、毎年1年を単位に（短期コースの受入も可）、肉牛・酪農・畑作のコースに分かれ研修を行います。農家に住み込みしながら研修する従来のやり方から、レディースファームスクールが寄宿舎のような形になっていることで、生活と実習のけじめがつくこと、精神的にも肉体的にもストレスが少ないこと、仲間を支えられてより良い環境で、農業を体験できることなどが、7年間継続することに繋がっていると思います。研修は理論と実習とからなり、その中でも農業実習が中心となりますので、地元の農家とのつながりが深くなります。又、地域行事などにも積極的に参加しています。1年間の研修を終え、3月の卒業の頃には、心身ともに成長した彼女たちが巣立っていきます。この7年間の卒業生66名のうち、道内には45名が残り、うち36名が農業関係に進んでいます。そして、新得町内には24名の人が残りの、道内各地で現在までに20名を超える人が結婚して定住するなど、驚異的な数字になっていることに、私たち自身驚いています。従来の「農業担い手の育成」を、しくみから変えていったユニークな研修



レディースファームスクール入校式(新得町)

が、農村地域の経済効果もあげることになりました。今まで農業を知らなかった彼女たちの目での感想や質問は、農家の意識を変えることにもなりました。家族経営だけでは、なかなか変化しにくい作業意識や、若い感性で見た農村の生活に刺激され、私たち農家も変化していつ

たのです。そして次第に築かれていった信頼関係で、労働力として根付き、各農家の生産力もアップしていきました。このような行政と地域が支えあった先駆的な取組みは、農村づくりのヒントになるものといえます。これからは、担い手の定着を他の町村とも連携することで、更に可能性をのばせると感じています。

「新得農村ホリデー研究会」は 田舎暮らしを楽しむことから

次に、同じく「人の交流部門」の銀賞となった「新得農村ホリデー研究会」の設立は、1992年ですから、12年前になります。新得町は、大雪国立公園を望む、日本で4番目の広い面積ですが、人口は7600人という小さな町です。その山・川に囲まれた緑豊かなわが町は、早くから外からの人を受け入れる寛大な地域風土がありました。この自然環境・田園環境を愛し、移り住む人と地域住民をむすぶきっかけとなったのが、この取組みです。決して派手ではなく、自らがこの農村での暮らしを楽しむ発想と、地域の小さな事業者がネットワークを組み、あせらずゆっくりやってきたことが、長く続いてきたことにつながっているのかもしれない。主な活動は、身近な取組みを楽しめるガイドマップにして、情報提供していることです。今でも毎年更新し、1万5000部を



新得農村ホリデーでの農業体験：羊の毛刈
(新得町)

発行しています。ガイドマップには、食べることに体験すること、遊ぶこと、泊まることなど、多彩な取組みが盛り込まれ、農村の中で楽しめる「交流」のリピーターを増やし、会員とおし他の活動にも広がってきています。もうひとつの活動として目に付くのが、独自で行う景観・環境整備が、田舎らしい景観に成長していることです。地域を愛する人たちのネットワークが育ち、今では他の団体とも連携して、新得の川を美しくしようと「新得水辺会議」が発足。昨年からは、新得町にあり、北海道の歴史遺産でもある旧狩勝線の調査や保存を考える「旧狩勝線を楽しむ会」など、地域一体となる活動に広がってきています。自らの暮らしをお裾分けするような取組みが、ネットワークを組むことで、地域と共に新しいコミュニティづくりの力となっている新しいタイプであり、北海道のグリーンツーリズムの先駆者的な役割を担ってきました。

「交流」の形、いろいろ……

審査を通して、「交流」には、いろんなタイプがあることを知りました。その中のいくつかをご紹介します。と思います。

直売所を中心に広がった交流を支える「マオイの丘公園直売所出店団体協議会」は、小学校の廃校跡地を利用し、生産グループ・JA・商店街・町が協力し、道の駅まで併設しました。10年余り消費者に顔を



道の駅「マオイの丘公園」における直売所(長沼町)

見える安心・安全な農産物を届けることをモットーに、今では北海道随一の売上と集客を誇っています。地元の人から都市近郊の人まで、リピーターが多いということも、都市と農村の信頼関係を築いてきた証しといえるでしょう。とくに農家の女性に活気があふれ、農村の活性化に成果をあげている取り組みです。

つぎは、昭和60年代より実施してきた小さな集落の景観整備で、代表者が「農村景観コンクール」で最優秀賞を受賞したのがきっかけで結成された「暑寒バストラル」の長年にわたる活動です。自主自立の精神が基本理念となり、1地域15戸30人という限られたコミュニティでありながら、個々が楽しみながら景観整備を進め、地域全体の個性となつて、そこから、外部の人とのあたたかい交流にと、つながったムラづくりの画期的な取組みが評価されました。何より、農業をリタイアしても地域に残れる仲間づくりが魅力的です。

そして、「幌加内町そば活性化協議会」の取組みです。水田の減反対策として止む無く導入されたソバですが、意欲的な取組みの結果、日本のソバの約10パーセントに達する大生産地となりました。町の自然と景観が、ソバで生かされ、10年間続けている「ソバ祭り」も世界大会に



地域ぐるみで交流受け入れを行う「暑寒バストラル」(雨竜町)

り「も世界大会にまで広がりを見せています。地域再生の核とするところまで成長したソバで、各種のグループが生まれ、若者や女性を巻き込んで大きく展開されようとしているところです。

この他にも、まだまだ紹介したい

取組みがいっぱいありますが、次の機会に。

楽しみな今後……

「交流」は、外部との交流には限らず、地域の人がお互いを理解し合う交流、地域の担い手を育てること等、多種にわたることに驚きました。そして、「人の交流部門」の審査を通して、その取組みが「景観」を育て、「地域特産物」を生み出し、磨きをかけ、「人の交流」へとお互いが深く結びついていることに、気づかされました。そして北海道各地で取り組まれている大小さまざまな活動を、情報交換できる場がいかに少なかったかと感じています。北海道の魅力ある地域を、まず知ること。この「わが村は美しくー北海道」運動のコンクールを通して、各地の元気な「わが村」が、お互いに支え合い、更に夢を広げられる活動につながることを期待しています。



「そば祭り」でのそば打ち大会(幌加内町)



7月中旬が見頃となる「そばの花」